上田秋成『ぬばたまの巻』の再検討

倉本　昭

一

『源氏物語』の書写を続ける隠士宗椿の夢に柿本人麿が現れ、物語が発生した歴史的背景を語り、『源語』は教戒の書ではないと説く。これが上田秋成『ぬばたまの巻』の内容であることは周知の通りである。この作品は秋成の物語観を知る上で大変重要なため、しばしば論及の対象になってきた。また国学上の論敵本居宣長の『玉の小櫛』に比べると、評価は低いが、『源語』研究史においても無視できない作品である。そんな『ぬばたまの巻』の研究史的意義に関しては、勝倉壽一氏が『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』（風間書房　平成六年）にまとめているので贅言を要しない。ただ、これから『ぬばたまの巻』を論じていくに当たって、それに見える物語論を私なりに要約することは必要であろう。まとめてみると次のようになる。

1、物語とは、世情に悲憤慷慨した作者が、時勢を憚りながら、自分の思う所を寓意の形で表しつつ書いたものである。

2、よって物語は勧善懲悪の方便になることもあるが、作者の思いはおぼろげにぼかされているので、教訓書としての意義を積極的に見いだせない。

3、『源語』は女々しい心で書かれた「何ばかりの益なきいたづら言」であるが、叙述の巧みさ、修辞の華麗さにおいて抜きん出ているので、定家いうところの「詩花言葉を弄ぶ」のが適当な鑑賞態度である。

4、『源語』の登場人物はいずれも善悪混在しており、倫理的に模範となる人はいない。しかし彼らを反面教師として己を慎むという意味で教訓は得られる。また「雨夜の品定め」では、世の様々なタイプの女性が鋭く描き出されるので、女性にとっては教訓のたねとなる。

5、しかし『源語』はあくまで「いたづら言」であるから、それに強いて勧懲の意を読み取り、春秋や仏典のように有難がるのは読者のさかしらにすぎない。

以上の論からすると、『源語』には作者紫式部の託した寓意があるはずだが、おぼろげにされていて、それが正しく読者に伝わる回路は閉じられていることになろう。寓意はあくまで読者の読みとったものにすぎず、それが作者の意図としたものと同じだという保証は

ない。そこで『源語』を教訓書とみなすのを読者のさかしらとして排斥し、詩花言葉を弄んで足れりというのだが、かといって物語の教訓性自体を完全否定していない。この最後の点を指して、評者たちは論が不徹底なものに終わっていると批判してきた。そうした意見は全く否定すべくもないが、従来この問題にばかり関心が向けられ、『ぬばたまの巻』の別の問題がおろそかにされてきたきらいがある。それは何あろう、無腸隠士すなわち秋成が添えた序、「うは書」にまつわる問題である。

二

『ぬばたまの巻』序には次のようなエピソードが書かれている。安永八年の秋、城崎温泉で湯治の折、秋成の隣部屋に宿る客が一冊の書をもたらした。それは宗椿という人の手になるものであった。宗椿は堺の人で牡丹花肖柏の門人、『源語』を死ぬまでに二四部も写したというエピソードを残している。秋成は持ち主に請われるまま、この宗椿の著作に傍注を加え、序を草して、本文冒頭の言葉にちなみ、題を『ぬばたまの巻』と名付けたという。

『ぬばたまの巻』は出版の予定があって、『享保以降大坂出版書籍目録』に

源氏野真玉の巻
作者　泉州堺宗椿
版元　南久宝寺町五丁目河内屋久兵衛
出願　天明元年十一月
許可　天明元年十二月十四日

とあることが早くから判明している。ここでも著者は宗椿とあるのだが、もちろん偽りで、実の作者は秋成である。これは現代人の我々には自明のことだが、宗椿著が仮託であることなら、当時の読者でも、それなりの知識を持っておればわかる。以下、どのような点から仮託が露見するかを検証してみよう。

第一、肖柏門人の宗椿は室町後期の人であるはずなのに、その著書『ぬばたまの巻』の物語論が近世の学者の説の影響下にある点。

既に重松信弘氏が『新攷源氏物語研究史』(風間書房　昭和三六年)で指摘しているが、『ぬばたまの巻』の『源語』論には契沖の『源注拾遺』の影響が濃厚である。たとえば『源語』の登場人物のうち、光、夕霧、薫、匂宮の性情を批判する文言が『拾遺』にあるが、『ぬばたまの巻』にもその四人をおとしめる部分がある。光と夕霧の部分を対比させてみよう。(『拾遺』は岩波書店版『契沖全集』による。『ぬばたまの巻』は中央公論社版『上田秋成全集』所載の『ぬばたまの巻』による)

光　『拾遺』　「源氏の薄雲にことありしは父子に付ていはゞ何の道ぞ。君臣に付ていはゞ又何の道ぞ」

『ぬばたま』　「(光源氏は)したに、しうねく、ねぢけたるところある君也けり。薄雲の御事は、よむ人ごとに罪おもしとこそ見れ」

夕霧　『拾遺』　「夕霧薫のふたりは共にまめ人に似たれど、夕霧は落葉宮におしたちて、柏木の霊に信なく」

『ぬばたま』　「大学の君いみじき有職にて、まめ人の名をと

り給ふと書なすかと見れば、小野の夕霧わけまよふは（傍注…柏木ノ妻ノ落葉君也）友がきの信なし」

その他、重松氏は①定家の言を引き、詞花言葉を弄ぶべしとした点、②各人物の性情に善悪が混じっているとした点、③紫式部の本意として教訓性を嫌っているとした点で、両書が共通していることを指摘している。これに④女の筆になるので内容は無益なことが多いという点（「其身女にて一部始終好色に付てかけるに損せらる人もあるべし」）も加えられる。

また物語一般論については、秋成校訂により出版された賀茂真淵『伊勢物語古意』の影響が見られる。刊本の本文を引くので、傍点の部分に注意して、後の『ぬばたまの巻』と対比されたい。（『古意』『新釈』は続群書類従完成会版『賀茂真淵全集』による）

『古意』　①「かゝるふみを物語と名づけたる事は、実（マコト）の録（フミ）のごとくはあらで、世の人のかたり伝へ来し事を、真言（マコト）・寓言（ソラゴト）をも問ず、其かたるまに〳〵書集たるてふ意にて、今云むかし〳〵の例（アト）なし物がたりに同じ」

②「此伊勢物語と源氏物語は、こゝに有し事をあらぬさまに書なしたれば即そら言也」

③「源氏は作れる人の在る世の事を憶ひて書るが、猶其人のありさまを定かにも擬（アテ）ずさま〴〵書たり。且むかしのみかどの御名を挙などして罪を逃れたるものぞ。然れば是はたもとよりそら言也」

④「むかし物がたりのそら言も、はた時をも人をも指まじきことわり」

『ぬばたま』　「（物語は）ひたすらそらごと（寓言）をもてつとめとし、専ら其実なしといへども、必よ、作者のおもひよするところ、或は世のさまのあだめくを悲しび、或は国のついえをなげくも、時のいきほひのおすべからぬを思ひ、くらゐ高き人の悪みをおそれて、いにしへの事にとりなし、今のうつゝ（現在）を打かすめつゝ、おぼろげに書出たる物なりけり」

引用を比較してみると、『古意』の③が、ちょうど『ぬばたまの巻』と同様の物語論を『源語』を具体例に説明したようで特に注目される。また①中の「寓言」は吉川弘文館の『賀茂真淵全集』では「虚言（ソラゴト）」、『校本賀茂真淵全集』で用いられた底本では「そら言」となっている。真淵はここで「そらごと」を「真言」「実の録」に対する意味で使う。ちなみに彼の『源氏物語新釈』を見ると、①と同じことを説いて、「物語とは実録ならで人の口づから伝へたる事を誠にまれ偽にまれ人のかたられんまゝに書付たる」とある。つまり、「そらごと」の意味するところは虚構の謂である。対して秋成のいう「そらごと」は「寓言」と当てられる通り、単なる虚構ではなく、寓意の存在が強いニュアンスとしてこめられる。それでも秋成は真淵のいう「そらごと」も自分の考えるものに同じと考え、『古意』本文にも寓言の字を当てたのである。確かに③を読むと作者の思いを託すという

ニュアンスが読み取れる。『新釈』では、このニュアンスが一層明らかである。（注1）

しかし『新釈』よりも『古意』の影響が濃厚で、次のように表現まで似た部分が指摘できる。

『古意』　⑤「大和今昔の二物がたりは、みづから巧めるにはあらで、人のかたるを聞まゝに書つれば、実も虚ごとも又いと異様なるも交れり」

『ぬばたま』「（今昔物語は）たしかならぬ事も、正しき事も、ひとつものに、聞がまゝを書あつめし、世がたりぶなみれば也」

このように物語を説くキーワード「そらごと」にまつわる部分では、真淵の影響大といえよう。

次に『源語』の代筆説を否定することに関しては、一応、安藤為章の『紫家七論』の影響が考えられる。（『七論』は岩波書店『日本思想体系39　近世神道論・前期国学』による）

『七論』其七正伝誤説「才徳兼美と、七事共に備りたるをおもふに、ちゝがちからをからずとも、此ものがたりはたやすく出来なまし」

其六一部大事「ものいひぶりのやすらかに、はかなくえんにやさしく書なす事、女の筆にして、しかも上手のしわざなる物なり」

『ぬばたま』「かゝるまめ事いかで女わざならん。父の為時が筆加へしと云。たとへ人のたすけなせりとも、ふみのこゝろのめゝしさをおもはゞ、さる論がましきことの益なくおもふのみ」

ただし女の筆になることを肯定的にとらえる『七論』に対し、『ぬばたまの巻』は反対の立場をとっているのが注意される。「こゝろのめゝしさ」云々は、むしろ先に④として引いた『源注拾遺』の一条が影響した可能性がある。

雨夜の品定めを賞揚することに関しては、同じ『七論』、さらに秋成の師加藤宇万伎の『雨夜ものかたりたみことは』と同様である。

『七論』其五作者本意「帚木の巻の品定は、一篇の女戒なれば、女といふ女によみならはせたくこそ」

『たみことは』「その人（筆者注　為章のこと）いへらく、天の下の女たらんものはなべてよませまほしう。されどなべてよみうべきにあらず。雨夜ものがたりの品さだめばかりは、せめてものしたらましと」

（参考）『源氏物語新釈』「人の心のくま〳〵女の用意などかくまでつくす事男にては猶いたるまじき事也。為章がいひたる、誠によく心を得たる物也。されば式部が作と定むべし」

『ぬばたま』「一部の大むねをもとむれば、雨夜の物がたりに世のある女のうへを、さまかたち、心ばへをまで、もらさじとかいあらはしたるほど

に、筆のすさみのゆくにまかせて、そこはかとなく書ひろめたる物とこそおぼゆれ。さるは女にて見ば、いとありがたき教へのふみとも云べし」

登場人物を反面教師として教訓を得られるという説は、これも『七論』にある。

『七論』其四文章無双「此ものがたりをよみて、其旨を得る人は、其身の風儀用意をかへりみて、をのこも女もおのがじゝ一箇の好人となるべし」

其五作者本意「此物がたり、専ら人情世態を述て、上中下の風儀用意をしめし、事を好色によせて、美刺を詞にあらはさず、見る人をして善悪を定めしむ。大旨は、婦人のために諷喩すといへども、おのづからをのこのいましめとなる事おほし。（この後人物の欠点を挙げていく）」

『ぬばたま』「しひて是よまん心しらびをもとめば、男も女も、世にあるうへをかたり出たるが、おほよそ隠るゝくまなくあなぐり出しかば、よむ人、おのれ〳〵がきたなき心ねを書あらはされて、今よりをつゝしむべきいましめともなりなましを」

最後に、読みようによって教訓を得られるという意見は、先の『七論』からの引用にもあったが、秋成の師五井蘭洲の『源語提要』凡例第五条に「古来此ものがたりに、褒貶のことをいへり。作者のこころは、たゞありのまゝにかきて、褒貶はよむ人の心にあるべし」と見えるのにも同じである。

以上、比較しながら見てきたように、『ぬばたまの巻』の説は、おおかた秋成以前の国学者の説に見いだせる。中には表現まで先人の説に似たものすらあった。たとえば光以下の人物の行儀を批判する下りでも、順番が違うとはいえ、『源注拾遺』を読んだものなら、それに拠ったことを疑うであろう。その上で読んでいけば、他にも『拾遺』と共通する説があるのだから、これは契沖の説を踏襲したと思われても仕方ない。真淵や為章も同様である。ことに真淵に関していえば、『ぬばたまの巻』の人麿は、真淵の『国意考』『歌意考』『にひまなび』などで説かれるのと同じ歴史観を披瀝するのである。それは儒仏の倫理こそが、天地自然の理にのっとっていた古代人の心性を歪曲し、世を乱すもとになったというものである。そのような文脈で「異（ひと）の国に立たる法（のり）どもをうらやみて、とりもちひさせしかば、おのづからなるやまと魂は、物学ばぬ人のみにとゞまりて」と言った場合、そこにある「やまと魂」の語は、真淵がいう「高く直きやまと魂」（『にひまなび』）を彷彿とさせないではおかない。だから『源語』注釈書に詳しくない者でも、真淵的歴史観を語ることに気づけば、『ぬばたまの巻』が宗椿の著ならぬことがわかる。

第二、この書が宗椿作とすると、巷間に伝わる彼の伝記と矛盾する点。

宗椿伝については美山靖氏が「『ぬばたまの巻』について」（『秋成の歴史小説とその周辺』所載　清文堂　平成六年）で考察している。それによると、肖柏の『春夢草』に、宗椿が病で空しくなるきわまで『源語』を写しており、「朝顔」の巻で筆をおいたというエピソードが見える。また『明翰抄』には「源氏朝顔ノ巻書ナカラ死」とある。さらに美山氏によれば秋成が直接拠ったかという『本朝語園』には「槿巻ニテ筆持ナガラ空クナル」とあり、『醒酔笑』には「廿四部目の槿の巻にてむなしくなりぬ」とある。つまり宗椿は死ぬ直前まで『源語』をおしいただいていたのである。ところが『ぬばたまの巻』では人麿に諭されて、「なかば書さしたる物を見るにも、いとうたてくなり、打ながめられて」とある。彼は『源語』をもはやありがたいものとは思わなくなったのである。これは諸書に伝わるエピソードとは全く異なっており、読者はここでも疑問をおぼえざるをえない。

三

中世の人間である宗椿が近世の学者と同じ説を記し、伝記では『源語』マニアのまま死んだはずなのに、それと矛盾する内容を書いている。この二つに気づいた読者は、『ぬばたまの巻』が宗椿の作であることを疑うはずである。そうなれば、序を書き傍注を記した無腸隠士が宗椿の名を借りて本書を作ったことに自然と思い至るであろう。この書が秋成の手になるものと最初から明らかにされていたなら、伝説的『源語』マニアを改悛させる趣向をフィクションとして楽しんでおればよい。しかし著者は宗椿だと公言する以上、読者はそれを信じてかかる。一方の作者はその言が偽りだと知れないようにするのが普通ではないか。ところが秋成は全く周到さを欠いている。彼が契沖や真淵の説に共鳴するにしても、それと気づかれぬ書き方をすべきであったのに、表現まで似せるとはいかなることか。それになぜ、人麿と意見の食い違ったまま宗椿が『源語』を書写し続けたという結末にしなかったのか。しかし、これらの問題も宗椿作としていなかったら、まだごまかしがきいたかもしれない。結局偽書であることは、序に宗椿とあることがきっかけで明らかになってしまうのだから。そもそも仮託する人物は宗椿以外に適当な人がいなかったのか。いっそ著者不明としてもよかったではないか。

このように『ぬばたまの巻』は偽書にしては手抜かりが多い。しかし、それが秋成の無神経さによるとは考えにくい。むしろ彼は宗椿著が仮託だとわかるようにわざと仕向けたのではないか。ではその理由は何なのか。結局「うは書」から導き出された問題は、『ぬばたまの巻』が他人の名を借りて書かれたことの意味は何かということになる。

これに対してまず考えつく解答は以下のようなものであろう。『雨月物語』の「貧福論」や『春雨物語』の「海賊」「歌のほまれ」など、秋成が作中人物に自分の見解を語らせている作品が他にもある。そこで『ぬばたまの巻』もそれらと同様に、作中人物の宗椿に己の物語論を語らせていると見ればよい。また伝記や史書の記述を意識的に改変して物語を創り出す手法は、『春雨』の「血かたびら」などに共通し、秋成には常套的な制作方法にすぎない。よってこの問題は秋成の作家的資質、制作方法に帰着させれば説明がつく。

こういった風に考えるのは間違いではなかろうが、なぜ秋成が序でわざわざ宗椿作とうたったかまでは説明できない。『雨月』も『春雨』も、たとえば岡左内作とか文室秋津作とはうたっていないのであるから。

では内容が出版規制にひっかかりそうだから、実作者であることを隠したのであろうか。それも考えにくい。そのような懸念があったなら、出版計画など出まいし、許可もおりまい。それに序に無腸隠士と記すことすら憚ったはずである。(注2)

そこで私が考えるのは、『ぬばたまの巻』が仮託の書であること自体に、何らかの趣向が隠されているのではないか、ということである。そのヒントとなるのが、北村季吟の『湖月抄』と、先にも触れた賀茂真淵の『伊勢物語古意』である。

『湖月抄』発端の「文法」に次のようにある。

「明星抄云。先此物語の大綱荘子が寓言にもとづけり。寓言といふは己が言を以て他人の名を借て以ていへりと也。荘子が文法は名を作り出してわがいひたき事をいはせたり。其云處はことごとく実の実也。今此物語に云處の源氏も、其真実を尋ぬればその人なし。書顕す所は実也。されば荘子が筆をまのあたりうつせり」

また「物語ノ準拠之事」に

「凡物語にはかやうに彼是の古事の例を以て書の故に、最初の詞にもいづれの御時にかといひてたしかに時代をささざる也。是世の褒貶をまぬがれんため、寓言の筆法也。」

とある。これらによると、他人に仮託して己の所懐を述べること、虚のうちに作者の実をもること、また世のそしりを憚って時代設定を曖昧にすることが寓言、ひいては『源語』の特色ということになる。とすれば、秋成が宗椿の名を借りたのはまさに寓言の筆法といえよう。ところが『湖月抄』に引かれる寓言論は、『ぬばたまの巻』で人麿が開陳する説と重要な点で相違する。つまり『湖月抄』にいう寓言は、他人の口を借りるという『荘子』に見える原義的な意味で使われており、さらに「云處はことごとく実の事」とある通り、文脈的に『源語』における教訓性を指摘することへと結び付く。よって大意に「或抄云、おほむね荘子カ寓言を模して作物語といへども一事として先縦本説なき事をのせず…凡て仁義礼智の大綱より、仏果菩提の本源にいたるまで、此物語をはなれて何の指南をか求めん」という記述も見えるのである。反対に人麿は「ひたすらそらごと(寓言)をもてつとめとし、専ら其実なし」と言っている。人麿は物語の教訓性を積極的には認めておらず、「そらごと(寓言)」に関して「あだ物」「いたづら言」といったニュアンスを強調する。ここでいう寓言は、作中人物の口を借りて作者の思いを語るという意味に対し、うそ、つくりごととしての「そらごと」の意味をも重ねているのである。(注3)

『湖月抄』所引の寓言論に従って作者を他人に仮託しながら、それとは異なる寓言論を人麿に語らせるのは不自然ともいえる。そこで真淵『伊勢物語古意』に説く物語論をも同時に考慮に入れた方が適当であろう。本書の物語=そらごと論が『ぬばたまの巻』に与えた影響は既に述べた通りであるが、それに以下のような文章が見える。

①「記者の名を題とせし物を見ず。其うへかゝるふみは記者の名をあらはすまじきをや」（「伊勢の御の書たらぬは」の条）

②「すべて物語ぶみには記者の名をかくせり。男の作れるも、かく戯れくつがへる事を書て丈夫の名をなのるべからず」（「古しへの本今の本又作者は」の条）

③「たま〳〵此朝臣の官位などを書る所に、其文と歌とを合せて見れば、時にかなはぬ官位をしるし、或は其歌を全く出せるは詞書を異にしなど、さだかにそれならぬさまにのみ書なしたり。よりて物がたりの物がたりなる事を意得て後に、業平のなり平ならぬを知べき也」（「昔おとこてふは」の条）

④「さて男は業平朝臣ならぬ業平を云と意得べし。皆そら言なれば也」（巻一「むかしおとこうひかうむりして」の注）

①と②は物語が実作者の名を出さないものだという説で、秋成が『ぬばたまの巻』を宗椿に仮託したのは、寓言の原義と共にこの説を意識したものではなかったか。真淵によると物語は「そらごと」であった。彼の言う「そらごと」に寓言の漢字を当てる秋成であるから、これも十分考えられよう。また近世の説を語る宗椿、伝記と違う宗椿像が描かれているのは、③の則を想起すれば「さだかにそれならぬさまにのみ書なした」のだと理解できよう。宗椿作が仮託にすぎないことを理解した読者は、「宗椿」の「宗椿」ならぬを知りえたわけであるが、そこで真淵『古意』の物語論を思い出せば、『ぬばたまの巻』が「物がたりなる事を意得」ることができる。作者仮託は本書が物語であることを証する趣向であったことになる。

四

現在では『ぬばたまの巻』を物語ととらえる見方は常識であるが、いずれも自明的にこれを物語、または物語的評論としてきた。（注4）対して私は作者の仮託の問題から、本書が物語＝そらごとであることを帰納してきたが、そんな繁雑な手続きを経なくとも、わかりきったことではないか、と思われるかもしれない。しかしその手続き自体に大きな意味があるように、私は思うのである。

そもそもこの物語で説かれる『源語』論は、秋成の先学の説のエピゴーネンでしかない。もっと正確に言えば切り張りのようで、新味がない。勝倉氏は「秋成の論説は、中世以来の物語論が『源氏物語』（『伊勢物語』を含むこともある）という特定の作品に対する解釈論としてその意義を論ずる傾向があったのに対し、これを物語一般の属性に拡大・敷衍してその存在意義の究明をはかったところに研究史的な位置を有する」と述べるが（『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』P261）、秋成は結局『源語』以外の作品に即して具体的には論じていないのである。そらごと＝寓言論を物語一般に敷衍すると同時に、それが実際他の物語作品にも当てはまるか否かを立証していなければ、高い評価は下せない。

『ぬば玉の巻』は出版されなかったようだが、当時の読者が読んだとしたらどうであったか。例えば真淵の『にひまなび』や『国意考』が刊行されるのは、『ぬば玉の巻』出版許可が出されて後のことだから（『国意考』が寛政元年、『にひまなび』『歌意考』が寛政十二年に刊行される）、真淵の思想を早く世間一般に伝える役割は果たせたかもしれない。しかし初めからそういう意図をもっていた

のなら、真淵以前の契沖・為章の説をもちださなくてもよかった。それに後で『古意』を刊行するように真淵の著作そのものを世に送ったはずである。また傍注をつけているところから、秋成は『源語』入門を欲する初学者を対象にしていたかと思われもするが、果たしてそうだろうか。秋成に啓蒙的精神があったなら、錯雑して一貫性のない論の展開はもう少し整理されるべきだったし、まともな評論の形をとるべきであった(注5)。しかし入門書の体裁を装いながら、彼が本当に対象としていたのは、契沖や真淵を熱心に読み込んでいるような読者ではなかったか。そういう人が『ぬばたまの巻』をまともに読んでも、『源語』論に関しては、先人の説の切り張りのようだからつまらなかったはずである。ただ、そう感じるくらいの人なら、宗椿著が仮託であることをはじめ、本書がまともな評論書でないことも見抜けよう。さらに本書が「そらごと」すなわち物語であることに気づけば本物の玄人といえるであろう。

『ぬばたまの巻』はそらごとの形でそらごとを語るのである。中身でいうそらごととは、実のない「あだ物」「いたづら言」であった。とすれば、それを語るそらごととしての『ぬばたまの巻』も実のないものということになる。さらに、そらごとの中で語られるそらごと論そのものが、そらごとだとなってくると、この作品は全くつかみどころがなくなる。かくも奇妙な構造の作品を作ったところに秋成独特の韜晦の姿勢を見いだすのも可である。しかし秋成は『ぬばたまの巻』の内容をどこまでまともに受け取ってもらおうとしていたであろうか。『ぬばたまの巻』を読む醍醐味は、内容に啓発されることと同時に、その虚構性を楽しむことにもあるのではないか。虚構性を楽しむこととは、まさにこの作品がそらごと＝物語であることを見抜く一連の知的作業にほかならない。私がとってきた繁雑な手続きはまさにその作業であった。我々はこれまで『ぬばたまの巻』が物語だと気づきながらも、それを真面目に受けとりすぎていた気がする。重松氏の研究以来、『ぬばたまの巻』の『源語』論、物語論の分析と位置づけが連綿と行われてきた。その中で契沖以下の学者の説の影響が指摘されたが、それは本書のそらごととしての性格を論じる作業につなげるべきであった。

私は『ぬばたまの巻』がそらごとである故に、そこに見える物語論をそのままの形で秋成の持論とみなすことは危険と考えたい。ただし、中には秋成が他の著書でも繰り返す意見が見えるので、全部が秋成の持論とは別にこしらえられたわけではない。例えば物語が作者の憤りからなるという論は以下の如く『豫之也安志夜』にも見られる。

「それ作り出る人の心は、身幸ひなきを歎くより、世をもいきどほりては、昔を恋しのび、或は今の世の中さく花のにほふが如く栄ゆくを見ては、やゝうつろひなん事をおもひ…たゞ今の世の聞えをはゞかりて、むかし〳〵の跡なし言に、何の罪なげなる物がたりして書つゞくるなん、かゝるふみの心しらびなりける」

『豫之也安志夜』はその性質からして、秋成の意見をストレートに述べているものだから、『ぬばたまの巻』のこれと共通する論を彼の持論と認めることは差し支えない。これが真淵の説から導かれたものにすぎないとしても、それに共鳴しているのは確かである。

しかし『源語』論の部分は、ばらばらにすると真淵を含む複数の国学者の説に還元されてしまう。というと、『豫之也安志夜』の内容も契沖、真淵、蘭洲といった人の説に還元できるではないかという批判が出よう。ところが『ぬばたまの巻』では主意の上で対立した説の折衷まで行われているのである。秋成が諸説の総合から自己の『源語』観を形成していたとしても、このような折衷は安易に過ぎないか。ここには後述の通り、むしろ作為的なものが感じられる。それに『豫之也安志夜』と違って『ぬばたまの巻』は「そらごと」であった。

秋成は物語の趣向の一として、宗椿に中世的な『源語』論（『源語』は教戒の書なり）を説かせたのに対し、江戸時代からの『源語』論、つまり国学的な『源語』論のモデルを諸説の切り張りによって作り、それを人麿に配したものといえないであろうか。それはほかならぬ、『ぬばたまの巻』を「そらごと」だと知らすために作られた仕掛けであった。こういう観点に立った上で注目したいのが、佐藤深雪氏の意見である。氏は『綾足と秋成と　十八世紀国学への批判』（平成五年　名古屋大学出版会）で次のように述べる。

「宣長は以外に保守的な伝統主義者であり、むしろ真淵の方が直感にもとづいた冒険をしている。真淵学徒たる秋成が、このような宣長の傾向を意地悪くデフォルメして、宗椿の中世的な源氏注釈学に託したというのは、ありえることである」

さらに氏は人麿の論について「真淵学徒たる秋成がよって立つところの上古主義の物語論を対置しようとしたのではなかったか」と言う。氏は宗椿の論に秋成のことさらな作為を読みながら、人麿の論は従来通り秋成の持論としてとらえている。しかし私は人麿の論にもやはり作為的なものを読みとった方がよいと考える。作為とは具体的には『源語』論の切り張りを指すのだが、たとえばどの説をどう利用するかにも秋成は意を用いていると見たい。

近世において『源語』観は一つではなかった。詞花言葉を玩弄すべしという態度をとる契沖に対し、為章や真淵は教戒性を認める。『紫家七論』に「物がたりをすべて作り事とのみいふべからず。みな其世にありし人のうへを述て、勧善懲悪をふくみたり…又詞花言葉をのみもてあそぶ人は、剣の利鈍をいはずして、たゞ柄室の銛りを論ずるごとし」とあり、『源氏物語新釈』総考に「文華逸興をもて論せむは絵を見て心を慰むるがごとし」とか「是はいと〳〵大きにふかくたくみかつは教成べき所々も侍るはおほむね異朝の書などにならへるもの也」とある通りである。これら主意において対立する人の説をどう切り張りするかに面白さがある。論理が破綻する恐れのないように、契沖なり真淵なりの説を一つ選んでアレンジするよりは手が込んでいるのである。ただし、この結果がうまくいったかどうかは判断に迷う。秋成の説が『源語』を教戒の書と見るか見ないかにおいて不徹底だといわれてきたのは、対立する説の接合が不自然に終わっていたからである。とはいえ、秋成が物語の趣向として国学的な『源語』論のモデルを作ったまでだとすると、それが切り張りだとわかればよいのであって、論理の破綻はあまり気にする必要がない。

従来通り人麿の『源語』論を秋成の持論としてとらえるのも決して無効ではない。そこには秋成の『源語』観が相当反映していたは

ずであるから。それに『ぬばたまの巻』は確かに評論的な読み方もできる。特にそらごとと直接関係のない歌論の部分は、『源語』論と同日の談ではない。(注6)しかし『ぬばたまの巻』は「そらごと」であるのだから、その内容の全てをそのままの形でまともに受けとったら、秋成の術数にはまってしまうのではないだろうか。かつて美山靖氏は、『春雨物語』に史実の切り継ぎによる再構成の跡を見出した(新潮日本古典集成『春雨物語　書初機嫌海』解説など参照)。一方私は『ぬばたまの巻』に『源語』論の切り継ぎを見出したわけである。

『ぬばたまの巻』は宗椿著と銘打ちながら、近世の学者の『源語』論が切り張りされ、宗椿の伝記と矛盾する点もある。読者はそれらをヒントに、この作品がそらごと＝物語であることを解かねばならない。その知的作業に『ぬばたまの巻』を読む面白さの一つがある。『ぬばたまの巻』は物語とされながらも、評論書のようにまともに受け取られてきた。それに対し、そらごとであることにこだわった上で本書のもう一つの読み方を提示してみたのである。本書には評論書的な読み方とそれの二様が存在することになる。私はここからさらに、同じ『源語』論がのる『秋山記』の問題、さらになぜ秋成が物語の形でしか『源語』を語らなかったかという問題に取り組むつもりであるが、それは稿を改めて論じることにしよう。

(注1)「此源氏も先は昔物語として昔延喜の御時よりの事の様に書たれ共、実は式部のある時に見聞ことを専らとして近き代々の事をもかねて書る物と見ゆ。朱雀院冷泉院など御名をあらはしたるは唐詩に漢帝をもて時を刺れるが如く也。されどもまこと延喜などの御事ならねば前後紛々としていづれともかたよらず、作り事のさまを見せたり」とある。『ぬばたまの巻』が出版されなかった理由については、偽書公刊に対して後々の影響を憚ったためだろうとする若木太一氏の考えがある。『江戸時代文学誌』2(昭和五六年十二月)を参照

(注3)中村博保氏は「秋成の物語論」において、「秋成は当時の「寓言(うそ・つくりごと)」の用法から「そらごと」のニュアンスを得、これを伝統的なものに拡大して考えるとともに、他方寓言を原義に近い類推表現(アナロジー)の意味、つまり他をもって自己を語るという意味に近づけて、この二つの両極端の意味を一つのことばの中に結びつけたと考えることができます。」としている。当論文は日本文学研究資料叢書「秋成」(昭和四七年　有精堂刊)所収。初出は昭和三九年。

(注4)古くは藤井乙男氏が『秋成遺文』で「小説の体裁をした源氏物語の評論」と述べる。美山靖氏は「「ぬばたまの巻」について」(初出は昭和四九年。平成六年　清文堂刊『秋成の歴史小説とその周辺』所収)で、これを「『源氏物語』評論の書」としながら「物語でもあった」とする。また風間誠史氏は「秋成『ぬばたまの巻』の論理」(「研究と資料」

ての別な読み方が出来る部分があることを指摘したかったのである。

（注5）12 昭和五九年十二月）に「物語仕立ての文学論」とする。注4に引いた風間氏の論文に「整理作業と余説若干」という副題がついているように『ぬばたまの巻』の論理構成は複雑に入り組んでいる。物語について述べているかと思えば、真淵的な歴史観を論じ出し、話題は和歌に移っていくといった具合である。

（注6）歌論の部分には真淵の影響が指摘できるが、今のところ、ここに切り張りの跡は見出しえていない。顕宗天皇の歌を仁賢天皇としたり、日本記歌謡の訓が誤ったりと、秋成がうろ覚えの記憶で書いたことが想像される。記憶に頼ったばっかりに犯した手抜かりは「朝顔」巻の内容に触れた部分の傍注にも指適されている（森山重雄『上田秋成の古典感覚』三一書房 平成八年）。これは『源語』論を切り張りで作ったことと矛盾するようにも思われる。しかし手元に文献を置いた上で行う単純なパッチワークでは、趣向があからさまで工夫に欠ける。秋成はそういう方法論ではなく、頭の中で諸説を組み合わせ、一つのモデルをつくりあげていったのであろう。また秋成は『ぬばたまの巻』に近接して柿本人麿に関する考証『歌聖伝』を書き、晩年にかけて万葉研究の成果を『金砂』『楢の杣』といった著にまとめてゆく。『ぬばたまの巻』の歌論の部分にはそうした研究も反映されている。よって『ぬばたまの巻』に従来通り評論として読んでいい部分があるのは確かである。本稿はそのような読み方を完全否定するのではなく、そらごととし